貧困児童の教育機会拡大と不正の役割

－デリー・スラム地域に暮らす子どもの教育アクセスとウソに着目して－

○　日本学術振興会／京都大学　　茶谷　智之（009013）

キーワード：教育アクセス、不正、スラム地域

１．研 究 目 的

本報告では、デリー・スラム地域に暮らす貧困児童の教育アクセス支援において、ウソが果たす機能を明らかにする。従来の欧米中心の社会福祉理論では、公正／不正の二分法的認識枠組みにより、不正な手段は否定される。しかし、公教育制度が十分に整備されていない状況において、不正な手段を用いて貧困児童が教育を受けられるようになることは否定されなければならないのだろうか。発展途上国では、公教育制度の不備を補うために特定の人が利益を得られる不公平な支援や､不正への支援者の加担が頻繁に見られる｡2014年に採択された国際ソーシャルワークのグローバル定義が欧米中心主義への反省をもとに策定されたのも、ソーシャルワークの現場を理解するうえで欧米中心の理論が限界を迎えているからである。そこで本報告では、インドの貧困地域におけるソーシャルワークの現場から、貧困児童の教育機会拡大における不正の役割を考察する。

２．研究の視点および方法

本研究では、ウソが用いられることによる教育アクセス実現過程への関与者の変化に着目する。スラム地域の貧困児童は、増加する教育支出に嫌悪感を抱く父親や教育熱心な母親のしがらみの中で学校に通学するか否かの選択を行い、自らの生のあり方を構築している（Das, V. 2015. *Affliction: Health, Disease, Poverty.*）。つまり、教育アクセス実現過程への関与者が変化することは、貧困児童の生のあり方の変化につながるのである。こうした貧困児童の教育アクセス実現過程で用いられるウソとそれに伴う関与者の変化を捉えるために、スラム地域における長期的な参与観察とインタビュー調査を行った（2014年6月-2015年5月、2017年2月-3月）。

３．倫理的配慮

調査対象者の人権保護のために、調査目的や内容の説明を徹底し、同意を得た場合のみ調査を行った。また、個人のプライバシーや社会活動家の保護のため、事例に登場する個人名、社会活動家が属する団体名、活動地域の名称は、すべて仮名とした。

４．研 究 結 果

（事例１）NGO 職員による子どもの年齢詐称

スラム地域に暮らす父親が、5 歳の娘を公立学校第 1 学年に入学させるために NGO 職員から支援を受けた事例である。入学手続きの方法に関する知識がない父親は、NGO 職員に入学申込書を代筆してもらい提出した。しかし、受付担当の教師から第 1 学年の定員超過を理由に受付を拒否された。近隣の私立学校や NGO 学校に通わせるだけの金銭的余裕のない父親が再度 NGO 職員に相談すると、NGO 職員は娘の年齢を詐称し、4 歳として就学前学級への入学申込書を再提出することとなった。その結果、娘の教育アクセスをめぐって父親と受付担当の教師や校長との交渉機会が広がり、入学手続きが進められた。ここでは虚偽の入学申込書を作成するなかで、娘の教育アクセスについて検討する関与者が、当初の父親から、NGO 職員、受付担当の教師および校長という複数人へ拡大したのであった。

（事例２）スラム住民がつくウソへの報告者の加担

NGO 学校への授業料支払い困難に直面した母親が、8 歳の娘を公立学校第 3 学年に編入学させるために報告者から支援を受けた事例である。母親は編入学に向けて一人で教師と交渉したが、第 2 学年を NGO 学校で過ごした娘は、再度第 1 学年からやり直さなければならないと言われた。しかし納得できなかった母親は、教師との再交渉に同行した報告者にウソの話への口裏合わせを依頼した。1 年間学校に通えなかったのは母親がどうしても村に帰らなければならず、そのあいだ子どもを児童福祉施設に預けていたというウソの話である。実際、母親が担当教師にその話をしたとき、教師は報告者に母親の話の真偽を確かめてきた。報告者は依頼された通りに口裏を合わせた。すると教師は近くにいた他の教師たちと話し合い、第 2 学年への編入ならば可能であるという内容の紙を作成し、これを校長に提出するように指示したのであった。そこでは、母親のウソに報告者が加担するなかで、娘の教育アクセスについて検討する関与者が、当初の母親から、報告者、母親が交渉した教師やその周りにいた教師、校長という複数人へ拡大したのであった。

上記の事例では、ウソが学校制度から排除される貧困児童と、NGO 職員や報告者、教師や学校長との結節点となり、新たなつながりを生成する機能を果たしている。それにより、貧困児童の教育アクセスが異なる立場の人から検討されるようになったのであった。

５．考 察

貧困児童の教育機会拡大における不正は、貧困児童が様々な理由で直面する教育アクセスの制限を異なる立場から捉えなおす機会を広げ、教育機会の問題を貧困家庭のみで抱えることを防ぐ役割を果たしている。もちろん、不正自体を正面から肯定することはできないが、それを欧米中心の社会福祉理論に沿ってはじめから否定するのではなく、福祉や支援の現場で不正が実際に果たす役割を捉える視座が、ソーシャルワークにおいて重要になると考えられる。